

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 59 号

発行日
2025.09. 15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○「空気を読む」について 日本人の弱点？

過日のネット記事に、「日本が降伏して太平洋戦争が終わったのが、1945年の夏。今年は戦後80年の節目の年に当たり、太平洋戦争を振り返るテレビ番組が多数制作された。そして今年の夏、もう一つ大きな話題となったのが、夏の甲子園に出場した強豪校、広島・広陵高校の暴力問題である。80年前の太平洋戦争と広陵高校の事件に共通する、日本人の弱点とは？『空気を読む』はさまざまな人のセリフに登場する。『空気に逆らってもいいことはない』『アメリカと戦争しないほうがいい』と言いくらい空気が、『一度動き出した空気に抗うのは至難の業』など」というものであった。

そして、「この文脈における『空気』と言えば、山本七平が1977年に発表し、日本人論のスタンダードとして定着した名著『空気の研究』が、思い浮かぶ。日本の社会を支配しているのは厳格なルールや論理性・合理性ではなくその場の空気…組織の意思決定においてすら空気が優先される。世論に左右されやすい政治、熱しやすく冷めやすい国民性、ムラ社会の因習、学級会による特定生徒のつるし上げ、『言わずもがな』や『空気を読む』ことが善しとされる日本人の気質。すべて『空気の産物だ』ということであった。

一時期、「KY(空気読めない)」という言い方が、若者を中心に流行したが、これもまた、ここで言う「空気論」と大いに連動してくるように思われるが、現在、子ども達が、この「日本人の弱点？」に苛まれ、過度なストレスや、そこからくる体調の異変が問題となっているという記事もあった！何とも複雑な話であるが、そこに、「ありのまま」でいられる場や関係が、一方で必要であるということである！

○AIの記憶とは？そこに自意識は存在するのか？

最近では、AIに関わる話題をよく取り上げているが、ある意味、私にとつては異変？である！、今回は、そのAIの記憶(力?)について、少し考えてみたいと思う！というのも、以前にも書いたが、現在、私(達)のHPに上げている記事の一部を、かのチャットボット(Chatbook)に読み込んでもらって、その「音声概要」までも提示しているわけであるが、そのそれぞれに、どのような関連性があるのか？つまり、以前の読み込みが、新たな読み込みと関連性があるのかどうかということである！

アウトプットとしては、同じ男女のペアの声(対話)が提示されるのであるが、どうも、その対話には、一貫性？が感じられないのである！もちろん、その対応?には、同じ人格(自意識?)の男女が対話しているように思われるが(反応、分析、パターンが同じ?)、それぞれの、言わば「記憶」が、一連のものとして感じられないということである(例えば、同じ表記のものであっても、その都度読みが異なっている?)!!その時々々の読み込みが、言わば、その男女の「記憶」として、蓄積されていない(脈絡がない?)ように思えるということである!!

比べることは、ある意味間違っているかもしれないが、我々人間は、文字であろうと、音声であろうと、自らが発したこと(言葉や文意)は、基本的には(忘れる)こともある!、「記憶」として覚えている!だから、次なる言葉や文意は、それを受けた形で発せられる!したがって、そこに「自意識」というものの存在を感得することが出来る!!そこがやはり、生身の人間とは違うということか?

○心配していた教職志望者減?実際は、そうでもないのか?!

ネット情報によると、心配していた、若い人達の教職志望者数減の減は、実際にはなく、相変わらず人気の職業であることが分かったとあった!!すなわち、その記事の見出しには、「中高生の『なりた職業』不動の1位、《教員は10年連続》人気が衰えぬ意外な背景 夢を持つことを強要する『ドリハラ』には要注意」とあった(東洋経済 Education×IT 8月28日配信)！ちなみに、「ドリハラ」とは、「ドリム・ハラスメント」のことだそうである(余計なことだが、相変わらず、何でもかんでも「〇ハラ」とするのは、もうコリゴリではあるが?)。

まあ、それはともかく、この記事は、「東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所では、2015年から10年にわたって『子どもの生活と学びに関する親子調査』を実施している。この調査をもとに発表された、子どもたちのなりた職業ランキングにおいて、『教員』は中学生・高校生で10年連続1位という結果になった。教員の人気が高い背景には、どのようなことが考えられるのだろうか。小中高の学校段階別や男女別の『なりた職業』の違い、経年による変化の特徴も含めて、ベネッセ教育総合研究所主任研究員の松本留奈氏に聞いた。:(24年度の調査では、小学4～6年生では『プロスポーツ選手』、中学生は『教員』と『プロスポーツ選手』、高校生は『教員』が1位となった。2015年の調査結果と比較すると、小学4～6年生では『YouTuber・Vtuber』がランク外から4位に、高校生では「SE・プログラマー」が13位から6位に上昇するといったデジタル社会の進展に伴う変化が見られるものの、『人気職業に大きな変化は見られない』と松本氏は話す。」とあった!

全体的な傾向としては、多分そうなのだろうなと思ったが、意外(いい意味で!)だったのは、もちろん教員志望の順位である!昨今の状況では、離職者や希望者の数は、かなり落ち込んでいると思っていたが、実は、そうでもないのかも!!しかも、試験倍率が、2.3倍になったとか騒がれているが?、ある意味妥当な数字とも言える!!いずれにしても、問題は、その後である!やりがいをもって、彼らが仕事をしているかどうかである!(井上)

○「話し合おう!」は、永遠の理想(幻想?)か?!

さて、このことは、過去、誰かが指摘していたかもしれないが(残念ながら、具には思い出せない)、自分達の社会のあり方として、みんなの意見や思いを出し合って、それを話し合いで決めていくということを、第一義的なルールとするのは、その時々の大切な約束事(理想?)であつた!古くは、「17か条の憲法」、近代になつては、「五箇条の御誓文」に見られる通りである!前者は、「和を以て貴しと為し」、後者は、「広く会議を興し、万機公論に決すべし」という件々である。なお、「17か条の憲法」が、かの「聖徳太子」によつてつくられたものかどうかは、ここでは問わない(あくまでも、その時代に、誰かによつて唱導されたということが大事であるということである)。

ところで、現在、ある意味でこの国(社会)においてもそのルール(理想)は、重要な原理・原則となつているが、実際は、(絶えず?)その逆方向で事態は進む?昨今では、「〇〇ファースト」というようになるが(我が国でも、「日本(人)ファースト」を唱える人々が増えている?否、顕在化してきている?)、みんな、自分(達)のことが大切なのである!だが、それだけを優先させると、全体がうまくいかない(ぶつかり合う!はたまた、それが「戦争」へとつながっていく?)!だから、そうならないためにも、そのルール(理想)を、大切な原理・原則としたのである!

たとえそうならなくても、そのことを、国(社会)全体が大事なものとして掲げるといふことが、まずは重要だといふことであるが、それは、ある種の「普遍値?」とも言える!!実は、このことを書く?と思つた直接のきっかけは、現在の「国(社会)」の、そして、それと同根の?「学校」の危うさを、こうした観点から捉え直すことが必要なのではないかと思つたからである!とりわけ「不登校問題」、そこから派生している「学校には行かなくてもよい?」は、まさにそれと直結しているといふことである!!では、「行く人」は、どうなのだといふことである!

○みなで話し合つて創り出すことが重要なのである!

ここでは、度々、前段の記事の補完的なものを記すことがあるが、今回も、そのようになる!!要は、ここでは、何が何でも、みんなが「学校」に行かなくてはいけないといふことを言っているのではなく、どのような学校にすれば、そこにある問題が解決されるのかを、みんなが話し合つて考え出すということが重要であるといふことを言っているのである!その意味では、「今(現状)の学校」をどうすればよいのかということでもある(当然のようであるが、その前提が、いつの間にか後景に退いている?)!

繰り返すように、「多様性」が必要であるといふことが、実しやかに唱えられるが、それが、結果として、分断や混乱だけをもたらすものであれば、そもそも何のための多様性かがおかしくなる!もちろん、緊急避難的なものは、一時期においては必要なこともあるが(逼迫性があるわけであるので)、未来永劫、それらが恒常化してしまつと、「学校」の存在意義自体が雲散霧消してしまうといふことである(それは、国/社会にとつては、大いなる危機である?)!

・短歌に託して「変わつていく?変わつていけない?」
・「空気を読む」は 日本人の弱点?
知恵?でもあつたはずだが?!

・AIの記憶とは? そこに自意識は存在するのか?
それさえも プログラミング次第?

・教職志望者減は ウソなのか?
表層的な喧騒に 決して感わされるな?!

・「話し合おう!」は 永遠の理想(幻想?)か?
だがそれでも掲げられるは 何故(なぜ)か?

・「多様性」は 安易に主張されるべきではない!
そこには 秩序(モラル)が必要なのだ?!

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕59)〈

〇二〇二からは、九州での隠れた事績を追つてその14

さて、ここでは、ある意味予定外の論考となるが、徐々に、その重要性が実感されるようになり、どうしてもここに入れ込みたいといふことで、謎の?「筑紫舞」のことを書いておきたい。すなわち、「筑紫舞」とは「筑紫備前子」と呼ばれる人々によつて古来伝承されてきたとされる伝統芸能であるが、跳躍や回転を取り入れた、独特の足づかいを大きな特徴とする「もので、「その起源は古く、『続日本紀』天平3年(731年)の記事にその名を見ることができ、以来、神舞、くつ舞など、何種類かに分類される二百以上の舞が、すべて口伝によつて伝承されてきた。現在では、箏曲家・菊呂桜校(きくろさくら)から戦前に伝承を受けた西山村光寿(みつひさ)を初代宗家とし、二代目宗家・西山村津奈寿をはじめとする数十人の弟子によつて舞の継承が行われ、その舞の実際は、毎年7~8月に福岡市中央区の大濠公園能楽堂で開催される『筑紫舞の会』などで見ることができ」とある(以上、ウイキペディアより)。

ただし、私の関心は、「尚、やはり戦前、現在は宮地嶽神社の奥宮として不動神社が祀られている横穴式石室古墳内で、当時の芸能者達によつて筑紫舞が舞われた場に少女期の光寿が同席しており、その縁で後年宮地嶽神社へ数曲の舞を伝授する事となった。現在でも宮地嶽神社では年に一回筑紫舞の祭典があり、官司や神職が舞を奉納している。ちなみに、『筑紫舞』には、舞手(翁)が三人、五人、七人、一人立ち(こちらは今はないであろう)というものがあつた。それは、あたかも倭国の『東方拔振』の構図を示しているようでもある」とあつたが、同、まさに、そこなのである!

要は、この舞が、宝物群の主であつた北部九州の王に捧げられていた宮廷舞がルーツと言われており、その舞手(翁)は、その時々各地の王を指すもので、「都の翁(みやこのおきな)を中心に、「肥後の翁(ひごのおきな)・越前・出雲の翁(いづみのおきな)・難波津より登りし翁(なにわのたかみ)・尾張の翁(おとぎのおきな)・尾張の翁(おとぎのおきな)・上毛野 等となつていくという構図が、そこにあるといふことである!重要な状況証拠である!!(つづく) (堂本彰夫) 編集後記) 9月も、半ばとなつた!今年は、一向に秋の気配が感じられない(沖縄でも、いつもは、それなりにある?)!困つたものである!季節(四季)は巡る?人も、その季節に呼応して生きる?それが、当たり前であつた!! (井上/堂本)